

令和4年12月7日

養父市議会議長 西 田 雄 一 様

総務文教常任委員会
委員長 谷 垣 満

総務文教常任委員会調査報告書

閉会中において、本委員会の所管事務調査につき調査したことを次のとおり報告する。

記

- 1 調査年月日 令和4年10月26日（水）
- 2 調査事項 国指定重要文化財名草神社保存修理工事の完成について
- 3 調査内容

国指定重要文化財名草神社保存修理工事の完成に伴い、名草神社の現地調査を行うとともに、教育部歴史文化財課から説明を受け、調査を行った。

江戸時代に妙見山の山中、標高800メートルの位置に建てられた名草神社は、但馬国を代表する大社であり、五穀豊穡を祈願する山岳信仰の神社として栄えた。

三重塔は明治37年2月に、本殿と拝殿は平成22年6月に国指定重要文化財となり、境内には合わせて3棟の国指定重要文化財が並んでいる。

平成24年3月、本殿と拝殿の屋根が3メートルを超える積雪の重みで大きく破損したため、宗教法人名草神社が主体となり、国（文化庁）、県、市の財政支援のほか、小佐地域の住民等による名草神社災害復旧工事奉賛会などの協力を得て、平成27年8月から建築以来初めての大規模保存修理工事に着手した。

拝殿は、平成28年に建物を曳家によって本殿側に10メートル移動させ、石垣の積み直しのほか、建物基礎修理、耐震補強などを行った。その後、建物を元の位置に戻し、屋根や建物を解体して、屋根は全面修理を行い、建物は破損していた柱や腐朽した部材を取り替えた。

本殿は、平成29年4月に工事着手し、建物全体を揚屋という工法で約1メートル持ち上げ、建物の土台を支える基礎石や基壇の石を水平に据え直した。その後、屋根を解体して破損した部材を取り替え、構造補強を行った。床下には耐震補強工事を実施している。また、本殿・拝殿の屋根は、薄い杉板を重ねた「こけら葺き」という工法で全面葺き替えを行ったほか、彩色調査の結果に基づき、建

築当初の彩色を復元した塗装や飾り金具などの修理を行った。

令和2年度からは、本殿・拝殿の防災工事に着手し、危険樹木の伐採、消火栓の新設・更新、自動火災報知器の更新、排水施設の整備、石垣修理を行い、建造物を災害から守る対策を強化している。

(まとめ)

平成24年の豪雪による建物の損壊から11年、工事開始から8年の工期と約7億8,000万円の費用をかけた、北近畿でも類を見ない大規模な歴史的建造物の保存修理が完成した。

事業主体の宗教法人名草神社をはじめ工事関係者、名草神社災害復旧工事奉賛会、長きにわたり担当した教育部歴史文化財課に対して敬意を表する。

金色、朱色に輝く創建当時の神社の姿は、妙見の山中の静寂の中あでやかに映え、100年先、200年先においても存在感を示すものとして感動を与え続けるものである。

保存修理では、こけら葺き屋根の工法や彩色技法など、わが国の伝統的寺社建築技術の粋が集約されている。今後においては、市としても周辺環境整備に努め、文化財の価値を守りながら広く世に伝える責務を担うこととなる。

懸案であった本殿、拝殿、社務所、三重塔周辺の消火栓などは今回整備されたが、放火・失火・落雷・漏電を原因とする防火対策、盗難防止対策、シカの食害による土留め、建物周辺の危険木の伐採などは、今後の継続的な懸案事項である。一宗教法人だけで行うには負担が大きく、必要なものについては、計画的に予算措置を図るなど支援が必要である。

また、参拝者を増やすためには、あらゆる情報媒体を駆使し、効果的なPRの方法を考える必要がある。その一つとして、メタバースを活用した情報発信についても検討されたい。

名草神社は江戸時代から氏子をもたない参拝型神社であり、日本を代表する山岳信仰の聖地の一つでもある。地域の宝を地域で守り維持していくために、市は小佐地区自治協議会などと連携し、イベントの開催や観光客に対応する案内ガイドの養成などを積極的に進められたい。